

令和4年度教育事業  
そにとつキャンプ  
～出合いのキャンプ～



1. ねらい

- ・新しい仲間と出合い、親交をもつ。
- ・みんなで協力する気持ちを培う。
- ・やり遂げることの喜びを感じる。
- ・自然（光、風、水、草木）を体感する。

2. 実施日

6月11日（土）～6月12日（日） 1泊2日

3. 対象者

発達障害のある小学校3～6年生

4. 参加者 / 募集定員

12名 / 12名

5. プログラム（要約）

「そにとつ」のキャラクターを活用した、ストーリーキャンプを行った。活動全体においては絵カードや「そにとつ」からのメッセージ動画を用い、活動の流れを子どもたちに示し、見通しをもって活動できるようにした。また、「キャンプのやくそく」として、大切にしたい事項を具体的に示し、キャンプリーダーのサポートを受けながら初めて出会う仲間と協力し、少しずつ達成感を積み重ねた。

スケジュール

6月12日（土）1日目

「はじまりの会」  
「そにとつウォークラリー」  
「ゆうやけハイク」  
「ふりかえり」

6月13日（日）2日目

「野外炊事」  
「ふりかえり」  
「おわりの会」

6月11日（土）

はじまりの会にて、12名の参加者たちには「秘密の組織“チームそにとつ”の新米エージェントとして集められた」という説明がされ、一人前のエージェントになるべくキャンプの間に課される様々なミッションに挑戦していくこととなった。

まず、お互いを知りあうためのアイスブレイクの時間が設けられた。参加者たちは「ネームトス」や「猛獣狩り」などのゲームを通して緊張がほぐれたようであった。

昼食を取った後は「そにとつウォークラリー」を行った。雨が降っていたため、屋内でのウォークラリーとなったが、薪割りやふとん敷きなど、館内の各地で課される小さなミッションを協力しながらこなしていくことで、班の親睦を深めつつ、施設のことを知ることができていた。

夕方から「ゆうやけハイク」を行った。少雨の中であったが、参加者たちは雨具を着ながら周辺を散策し、だんだん暗さを増していく空模様や、雨具にあたる雨の感触を楽しんでいた。



6月12日（日）

前日と打って変わって快晴となった2日目は、野外炊事場でのちゃんこ鍋づくりを行った。班ごとに「調理係」と「火おこし係」に分かれ、分担しながら作業を進めた。薪割りは前日のウォークラリーで経験しているため、火おこし係はケガもなくスムーズに準備を進めた。どの班も調理係の準備ができる頃には火が付き、準備は万端といったところであった。

昼食後は今回のキャンプのふりかえりを行った。自分や班の仲間が頑張っていたところや、次回のキャンプに向けた目標を出し合い、再会を誓っていた。

6. まとめ

今回のキャンプは、次回以降のキャンプに向けて、参加者同士の親睦を深めるとともに、曾爾青少年自然の家に親しみを持ってもらうことを主な目的とした。一つ一つのプログラムを参加者同士の相談や協力が必要なものにする中で、意見を出し合ったり、助け合ったりする姿を見ることができた。

次回のキャンプでは、出合いのキャンプよりも難しい課題に挑戦し、それをクリアすることで達成感を積み重ねていけるよう準備していきたい。

（企画指導専門職 山内康平）

令和4年度教育事業  
そにとつキャンプ  
～冒険のキャンプ～

1. ねらい

- ・冒険的なプログラムをやり遂げることで達成感を感じる
- ・協力することの大切さを実感し、社会性を養う
- ・成功体験の積み重ねを通して自己肯定感を養う
- ・保護者同士の子育てについての意見交流を図る

2. 実施日

9月23日(金・祝)～25日(日) 2泊3日

3. 対象者

発達障害のある小学校3～6年生  
及びその保護者

4. 参加者

児童：11名  
保護者：15名

5. プログラム(要約)

引き続き「そにとつ」のキャラクターを活用した、ストーリーキャンプを行った。今回は「一人一人が最後までやり遂げる」ことをコンセプトにして、各々が達成感を感じることができるようなプログラム構成とした。前回のキャンプで出会った仲間たちと助け合ったり励まし合ったりしながら、さらに難しくなったミッションにチャレンジした。

また、冒険のキャンプでは保護者プログラムも同時に開催し、保護者どうしの交流や研修を行った。  
スケジュール

9月23日(金・祝) 1日目

「はじまりの会」  
「体育館あそび」  
「キャンプ場準備」  
「火おこしチャレンジ」

9月24日(土) 2日目

「竹の食器づくり」  
「山登り」  
「火おこしチャレンジ」  
「キャンプファイヤー」

9月25日(日) 3日目

「キャンプ場の片付け」  
「ソロ炊事」  
「ふりかえり」  
「おわりの会」

9月23日(金・祝)

日本の南に発生した熱帯低気圧の影響で、大雨の中の開催となった。参加者は体育館「なかよしホール」に集まり、はじまりの会やアイスブレイクを行った。参加

者は前回のキャンプで共に様々な課題にチャレンジした仲間との再会を喜んでいて。

雨天プログラムとして、「体育館あそび」を行った。なかよしホール内に「大縄跳び」、「スラックライン」、「ストラックアウト」を設置し、さらに併設されている「クライムウォーク」にも挑戦できる。それぞれの遊びでは、班ごとに具体的な目標を設定し、それを達成できるように活動することとした。

夜は、最終日に行うソロ炊事に向けた「火おこしチャレンジ」を行った。ほぐした麻紐にファイヤースターターで着火することを目指す活動である。初め、参加者たちは着火どころか火花すら出せず、ボランティアスタッフの助言を受けながら何度もチャレンジしていた。



9月24日(土)

前日と打って変わって快晴となった2日目は、まず「竹の食器作り」を行った。最終日のソロ炊事の際に使う食器を、竹を削って作る活動である。参加者たちは諸注意を聞いた後、やすりを使ってコップ、皿、箸の順に作り、煮沸消毒をした後乾燥させた。

午後は、「自然の家に帰還せよ!」という名のミッションとして、三重県津市太郎生出張所から亀山峠を歩いて徒歩で自然の家に帰る登山プログラムを行った。バスで移動した後、スタート地点が三重県津市であることを伝えた。「え!?三重から歩いて帰るの?」「何kmあるの?」と驚く声が聞こえたが、グループで互いに声を掛け合いながら歩き続け、亀山峠から自然の家の建物が見えた時は自然と「おおー!」と歓声を漏らす参加者の姿を見ることができた。

夜は、前日に引き続き「火おこしチャレンジ」を行った。前日に着火できなかった参加者の多くはリベンジに燃えており、より集中して取り組む姿が見られた。また、着火に成功した参加者からは「すごい達成感」という言葉も聞くことができた。

その後、保護者を交えてキャンプファイヤーを行った。ボランティアスタッフたちによる巧みな進行で、火を囲みながら楽しくも心落ち着く時間を過ごすことができ、それぞれの良い思い出になったようであった。



## 9月25日(日)

最終日は、これまでの火おこしチャレンジの成果を発揮する「ソロ炊事」を行った。一人につき一つのカマドを使い、空き缶での炊飯とレトルトカレーの調理をした。着火に苦労した参加者も多かったが、何とか全員が火を起こすことができ、昼食にありつくことができた。前日に作った竹の食器で味わうカレーは格別だったようで、「竹の風味が少しあっていい!」と喜ぶ参加者の姿を見ることができた。



## 保護者プログラム

そにっとキャンプ～冒険のキャンプ～保護者向けプログラム(以下、保護者プログラム)も、子どもたち同様、3日間にわたり行った。保護者プログラムは、2名の経験豊かな講師による講義を中心にプログラムを進めた。

1日目は、大和高田市教育委員会の吉田昌功先生に、「自律する子育て」、「行動の分析と伝え方」をテーマに講義をして頂いた。一方的な知識や経験の伝達に終始せず、互いの顔を見ながら話を進めていただいたことで、既成概念やバイアスに捕らわれず「本質」を捉え、参加者が自己開示していくきっかけになる様子が見受けられた。

2日目には、多方面で活動されているNPO「地球元気村」自然学校の奥田博先生に講義をして頂いた。奥田先生には「そにっとキャンプ」初期よりアドバイザーとして関わって頂いている。「我が子理解」、「我が子の特性を知る」をテーマに、これまでの経験から、子どもたちを理解するための視点について話して頂いた。また、そにっとキャンプにおける「保護者会」が果たしてきた役割や、そにっとキャンプに関わりの深いボランティアの話も聞かせて頂いた。

最終日となる3日目は、再び吉田先生に「自分を生きるために」というテーマで、保護者のみならずすべての参加者で「対話」を行った。積極的な対話のやりとりの中、我が子に関する心配事から、親である自分自身を見つめなおす機会になった保護者の姿も散見された。

大人が精神的に距離を縮めるには、子ども以上に負荷が大きくなりがちである。講義の合間や夜のナイトハイク、焚火の時間を活用して、予め提出して頂いたアンケートより、日頃の疑問や悩みを共有し互いに思いを出し合う時間を設定した。2日目には、保護者による亀山登山を行った。三重県側から登頂してくる子どもたちと久々に再会し、保護者の皆さんが喜びを露わに

する姿が印象的であった。同時に、保護者間のコミュニケーションも活発になってきた。2日間共、夜には、任意で交流する時間を設けたが、すべての保護者が参加し、充実した時間を共に過ごすことができた。3日目には、子どもたちと同時刻に同じ内容(ソロ炊事)を行った。火をおこすことの難しさも体験する中で、子どもたちの頑張りに思いを馳せ、保護者どうしも互いに助け合う姿が見られた。

初日には「保護者自身が参加」することや「子どもたちと行動を共にできないこと」に抵抗感をもっている方も見られたが、意義深い講義や対話、そして保護者自身が活動する中で、充実した時間を共にできた満足感をアンケートから感じることができた。



## 6. まとめ

前述の通り、今回の事業では「参加者一人一人が最後までやり遂げ、達成感を感じる」ことを重視してプログラムを展開した。共通のゴールに向けて一人一人が頑張れるよう工夫した結果、どのプログラムでも誰一人として諦めることなく、最後まで取り組むことができていた。特に、火おこしのプログラムでは「できない! むずかしい!」と言いつつも、やり方を変えたりアドバイスを求めたりしながら、何度も何度も挑戦する姿が印象的であった。また、参加者アンケートからは、「最後までやり抜く! をこれからも大事にして頑張りたい」といった記述も見られ、事業のねらいとプログラムが合致していたといえる。

(企画指導専門職 山内康平、三木智拓)